

アイヌ文化と緊急地震速報チャイム

新目 竜一



NHKをはじめテレビ、ラジオなどで使われている「チャラン・チャラン 緊急地震速報です 強い揺れに警戒して下さい」という緊急地震速報（最大震度が5弱以上と予想された場合に、震度4以上が予想される地域を対象に発表される）を知らせるチャイムが流れると、思わず背筋に緊張感が走る。

恐怖感とまでは言はないものの、何とも言えぬ緊張感が走り、どのくらいの地震規模なのか、津波はどのようなのかなど大いに気がかりなものである。

この緊急地震速報を知らせるチャイムは、当研究所第7代所長の伊福部宗夫氏の長男で、人工内耳を開発するなど福祉工学を確立し、医学・工学・福祉の境界を取り払った先駆者である東京大学及び北海道大学名誉教授の伊福部達（いふくべとおる）氏の作曲によるものです。また達氏の叔父（父の弟）は「ゴジラ」や「座頭市」などの映画音楽の作曲家で有名な伊福部昭氏である。

NHKからの依頼を受けた達氏は、当初は若い頃から好きだったロシアの作曲家モデスト・ムソルグスキー（1839-1881年）の組曲「展覧会の絵 古城」をもとに作ろうと考えたそうですが、後世に作られた編曲が膨大にあり、どこまで緊急地震速報チャイムに改変して良いのか、著作権の問題を短期間でクリアできるのかという大きな壁にぶちあたったそうである。

そこで、2006年に亡くなった叔父の昭氏が作曲した純音楽（西洋クラシックの流れを汲む現代音楽）の

「シンフォニア・タブカーラ」の第3楽章「Vivace」の冒頭の和音をアルペジオ（低音から高音に順番に弾く奏法）化し、急激に音階を上昇させることで注意喚起するかたちにしたそうです。（「ゴジラ」のテーマ曲も検討したそうですが、知名度がありすぎると恐怖感を煽ってしまうという理由でやめたとのこと）

「シンフォニア・タブカーラ」は、昭氏がアイヌ文化から受けたインスピレーションを元に作曲されたもので、タブカーラとはアイヌ語で、「立って踊る」という意味で、アイヌの伝統祭り、熊祭りが最高潮に達

したとき、長老が立ち上がり、即興で足を踏みしめて踊るのを「タブカーラ」と呼ぶそうです。

また達氏の父である宗夫氏は道路工学の専門家であるとともに、アイヌ文化への造詣も深く、「沙流アイヌの熊祭」を執筆しておられる。

達氏は、人工内耳の開発の外にも、80年前の樺太アイヌの蠟管再生プロジェクトや人工声帯や超音波メガネの開発などをされていますが、蠟管再生プロジェクトでは蠟管のカビを除去するのに美術修復家を訪ね、人工声帯の研究では腹話術師の協力を仰ぎ、超音波メガネの開発のために自らコウモリを飼育するなど、その発想力と行動力には驚かされるとともに、少しでも見做えればと思うところである。

地震大国日本では地震のない日はなく、東日本大震災以降も、熊本地震や北海道胆振東部地震などが発生しており、2019年も震度1以上の地震が1564回あり、1日平均4回以上どこかで地震が発生している計算になり、このうち震度4以上の地震が40回あり、10日に1回は発生しているのだが、2011年以降では、震度1以上の地震の回数も震度4以上の地震の回数も一番少なかったようである。

緊急地震速報チャイムを聞いて、アイヌ文化に思いを馳せる余裕はないかもしれないが、本稿が掲載される5月には、既に（4月24日）北海道白老町ポロト湖畔にウポポイ（民族共生象徴空間）が開園予定となっているので、新型コロナウイルスの終息状況が見えないところではあるが、是非機会を見て行きたいと思っている。

【参考文献】ゴジラ音楽と緊急地震速報
あの警報チャイムに込められた福祉工学の
メッセージ

伊福部 達 監修
筒井 信介 著